

障がいのある生徒における自分で書く・見る・できるの セルフマネジメント

Supporting to acquire self-management by a student with disabilities through writing sheets, checking operation manuals and enhancing his own behaviors.

山田沙樹・高山仁志・土田菜穂・中鹿直樹

Saki Yamada, Hitoshi Takayama, Naho Tsuchida, Naoki Nakashika

立命館大学 総合心理学部

College of Comprehensive Psychology Ritsumeikan University

Key words: 職場実習, 学生ジョブコーチ, セルフマネジメント, 「できる」の拡大

目的

立命館大学では、2010年より、実践・研究施設として大学内模擬喫茶店舗が活用されてきた(中鹿・尾西・小島・土田・望月, 2019)。

また、道城・松見(2007)によれば、目標設定を単独で用いた場合よりも、目標設定とフィードバックを組み合わせて用いた方が効果的であると示されている。

本研究の目的は、職場実習場面において、①対象生徒が自己記述を行う際に学生ジョブコーチ(以下SJC)からフィードバックが与えられるか否かによって、また、②業務中に自己記述の内容に焦点を当てたフィードバックが与えられるか否かによって、対象者のセルフマネジメントにどのような変化が見られるかについて検討することである。

方法

場所 立命館大学の構内に設置された模擬喫茶店舗であった。

期間 201X年9月Y日～201X年9月Y+4日の計5日間であった。

対象者 特別支援学校に通う高校1年の男子生徒1名であった。実習に入る前段階において、保護者に実習の説明を行い、書面にて実習参加への同意を確認した。

実習の1日のスケジュール 対象者は、午前と午後に喫茶店業務に取り組んだ。各業務に入る前には目標を、終了時には振り返りを行った。

手続き まず、SJCが課題分析に基づいて一冊にまとめた手順書をあらかじめ用意した。そして、対象者は、その手順書を参照しながら開店・接客・調理・配膳・レジ・片付け・閉店といった一連の業務を遂行するよう求められた。対象者が手順書に記された行動を自発したとき、SJCは言語賞賛による即時強化を行った。また、対象者に対して、業務に入る前に「今日できるようにしたいこと」を、振り返り場面では「今日がんばったことや気をつけたこと」をシートの所定の欄に記入するよう求めた。5日間のうち1、2日目をBL期、3、4、5日目を介

入期とし、ABデザインを用いた実践を行った。介入期では、目標設定場面である業務前のシート記入時に業務前にSJCがフィードバックを行った。さらに、業務中に対象者が目標として記入した内容と関連した業務行動を自発したとき、SJCが即時フィードバックを行った。

結果

BL期では手順書に示されている行動でも、SJCに正しいかどうか確認する行動が多かった。一方、介入期ではSJCに対して評価を求めめるのではなく、手順書を見ながらの自己確認が増加した。介入期における対象者のセルフマネジメントを示す行動の増加が認められた。

また、介入期では、対象者が業務前に立てた目標を達成した直後新しい目標をSJCに言語報告する様子や、業務遂行における手順書には示されていない新奇な工夫が出現する様子が確認された。

考察

介入期では、①対象生徒が業務を遂行する、対象生徒なりの工夫を示す、②指導者が対象生徒を褒める、③対象生徒がさらに新しい工夫を示す、という循環が生じたと捉えられる。

業務前に対象生徒が目標を設定することにより、業務中に目標と関連する行動を示したときに指導者がそこに焦点を当ててフィードバックを行うことが可能となった。つまり、指導者側のフォーカスが定まって、一見見逃しそうな工夫でも拾うことが可能となり、対象生徒の工夫が際立ったと考えられる。

文献

道城祐貴・松見淳子(2007). 通常学級において「めあて&フィードバックカード」による目標設定とフィードバックが着席行動に及ぼす効果 行動分析学研究, 20(2), 118-128.

中鹿直樹・尾西洋平・小島 遼・土田菜穂・望月 昭(2019). 障害のある生徒を対象とした大学内模擬喫茶店舗における職場実習 対人援助学研究, 8, 14-22.